

2015年度  
**第12回モニタリングサイト1000**  
**シギ・チドリ類調査**  
**交流会 金沢(石川)**

**要旨集**



**日時:2015年10月24日(土) 10:30~16:30**  
**会場:本多の森ホール 2F 第3会議室**

# 2015年度 第12回モニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査交流会 金沢(石川) プログラム

日時:2015年10月24日(土) 10:30~16:30

会場:本多の森ホール 2F 第3会議室

- 0. 開会** 10:30~  
開会挨拶
- 1. 自然環境モニタリング** 10:35~11:35
- 1-1・モニタリングサイト1000と生物多様センターのモニタリングの取り組み  
環境省自然環境局生物多様性センター 最上 祥成
- 1-2・モニタリングサイト1000 シギ・チドリ類調査  
NPO法人 バードリサーチ 守屋 年史
- 昼休憩 (11:35~12:35)**
- 2. 北陸地域のシギ・チドリ類** 12:35~13:30
- 2-1・石川県のシギチドリ類  
日本野鳥の会石川 顧問 矢田 新平
- 2-2・高松海岸のシギ・チドリ類  
公益財団法人 山階鳥類研究所協力調査員 中川 富男
- 2-3・北陸のシギ・チドリ類の生息場所  
千葉県立中央博物館 桑原 和之  
日本野鳥の会石川 平田 豊治  
株式会社プレック研究所 今井 優
- ポスター発表 (13:30~15:00)**
- 3. その他の発表** 15:00~15:40
- 3-1・京都府の巨椋干拓地におけるケリの個体群の季節的動向  
兵庫県立大学 脇坂 英弥
- 3-2・シギ・チドリ類調査へのお誘いのお誘い  
NPO法人 バードリサーチ 奴賀 俊光
- 4. 意見交換** 15:40~16:30
- 5. 閉会**

## **ポスター発表**

- P-1・東アジア最大級のシギ・チドリ渡来地の状況  
生態的、社会的つながりから見た中国・鴨緑江河口干潟  
公益財団法人 世界自然保護基金ジャパン 安村 茂樹
- P-2・河北潟周辺のシギ・チドリ類  
日本野鳥の会石川 中村 正男
- P-3・一色干潟で観察された標識キアシシギ  
西三河野鳥の会 高橋 伸夫
- P-4・シロチドリの現状について  
NPO法人 バードリサーチ 守屋 年史
- P-5・東京湾岸のシギ・チドリ（三番瀬を中心にして）  
千葉県野鳥の会 田久保 晴孝

## **懇親会 18:00～**

台場 金沢駅前店

## **エクスカージョン**

10/25(日) 8:15 金沢駅西口集合  
白尾海岸、高松海岸など

## モニタリングサイト1000と生物多様センターのモニタリングの取り組み

最上 祥成(環境省自然環境局生物多様性センター)

環境省生物多様性センターは、自然環境・生態系に関する基盤情報の収集と発信、標本収蔵等を主な業務としているセクションです。

日本の国土は、亜寒帯から亜熱帯にまたがる大小の島々からなり、そこには屈曲に富んだ海岸線と起伏の多い山岳など、変化に富んだ地形や各地の気候風土に育まれた多様な生物相が見られます。「重要生態系監視地域モニタリング推進事業(モニタリングサイト1000)」は、このような様々な生態系を約1000地点でモニタリングし、日本の自然環境の質的・

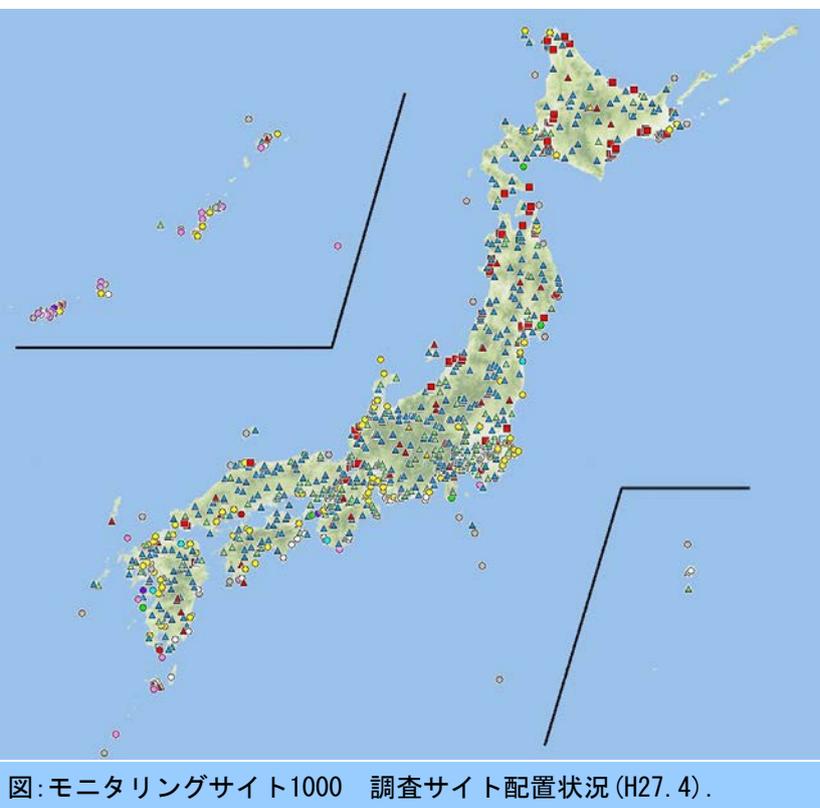


図: モニタリングサイト1000 調査サイト配置状況 (H27. 4).

量的な変化を把握する取組で、生物多様性センターの重要なプロジェクトの一つに位置付けられています。

モニタリングサイト1000が開始して10余年が経ち、多くの方々のご協力のもとで多数のデータが蓄積されてきました。特定の種の減少や増加の傾向、地球温暖化によると考えられる植物の伸長量の変化、東日本大震災前後での底生生物相の変化等が把握されつつありますが、継続的かつ多数の定点におけるモニタリングゆえに得られた成果と言えます。

これまでの成果は年次報告書のみでなく、過去のデータや解析結果を踏まえ5年に1度作成する「とりまとめ報告書」(昨年度までに第2期分を完了)、数値データは公開可能な範囲で「データファイル」等としても公開しており、またこれらの成果は、環境保全施策の検討や学術研究等に活用されているところです。

今回は、このような内容に触れつつ、モニタリングサイト1000の全体像についてご紹介します。

## モニタリングサイト1000 シギ・チドリ類調査

守屋 年史(NPO法人バードリサーチ)

シギ・チドリ類調査は、主体を変えながら30年以上続く全国的な調査である。2004年度から環境省事業モニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査に引き継がれ、当会は2008年度から事務局を務めている。

この調査は、全国に100ヵ所以上の調査サイトがあり、多くの一般ボランティア(市民調査員)によって調査が支えられている。継続的なモニタリング調査の結果は活用され、ラムサール登録の基礎資料や、絶滅危惧動物(レッドデータリスト)の検討のための参考資料として利用されている。調査体制、長期モニタリング調査の重要性や、調査の結果からみえたシギ・チドリ類の状況について報告する。

### ○モニタリング調査体制

調査は、春(4～5月:繁殖のため北に向かう)、秋(8～9月越冬のため南に向かう)、冬(12～2月:日本国内で冬を越す)の年3シーズンに実施されている。期間中に複数回調査を行いその各種の最大数を合計し、最大渡来数としている。また一斉調査日という日を設け、全国で一斉に個体数を数える調査を行なっている。

### ○長期モニタリング調査

モニタリング調査で最も重要なことは、長く同様の調査を継続していくことである。基礎になる比較可能なデータがあれば、環境変化による影響を推測できる。また将来的な変化についてもある程度予測することができる。

そのためには、無理のない調査を設定することや、仲間と共同して調査する体制をつくることが望ましい。また、拠点となる施設、グループが存在することは、調査に関心のある人に接点を設けるといって非常に有効であり、調査が継続しやすい。

### ○シギ・チドリ類の状況

シギ・チドリ類の多くは、極北から東南アジア・オセアニアを往復する旅鳥である。国内では春期に最も多く観察される。しかし、シギ・チドリ類は1970年代と比較すると大きく減少し、2000年以降もゆるやかな減少傾向が引き続き続いており、生息環境の保全が重要な課題となっている。

### ○モニタリングサイト1000第二期とりまとめ

2008年から2012年までの結果をとりまとめ、シギ・チドリの種、調査サイトに焦点を当てた近年の評価を行なった。シギ・チドリ類は春期、秋期、冬期を通じて減少傾向にあった。サイトに注目した評価により、新たにラムサール登録湿地の水鳥の登録基準をクリアするサイトは57箇所あった。保護区などにより干潟の保全面積は広くなく、速やかな指定が保全上生息地を守る上で有効であると考えられる。

## 石川県のシギチドリ

矢田 新平（日本野鳥の会石川 顧問）

石川県で記録されているいわゆるシギチドリは65種である（石川野鳥年鑑2013）。

内訳は1996年以前の記録しかない種はオオキアシシギ、チシマシギの2種である。1996年より2014年までに記録が1回のみ種はヨーロッパムナグロ、ソリハシセイタカシギ、コキアシシギ、メリケンキアシシギ、レンカクの5種、2回のみはヒメハマシギ1種、3回はオオチドリ、シベリアオオハシシギ、ヒメウズラシギの3種、4回はハリオシギ、カラフトアオアシシギの2種である。その他観察回数は複数あるが、個体数が少ないと思われるレアな種はコシヤクシギ、ヨーロッパトウネン、ヘラシギといったところである。

県内で繁殖記録のあるシギチドリはタゲリ、ケリ、イカルチドリ、コチドリ、シロチドリ、ヤマシギ、イソシギ、タマシギである。タゲリは1972～3年に柴山潟干拓地で、ヤマシギは舳倉島での記録がある。その他、オオジシギは小松空港、能登空港で繁殖の可能性がある。冬鳥として渡来するシギチドリはタゲリ、ミヤコドリ、ヤマシギ、アオシギ、タシギである。主に旅鳥だが、一部越冬する個体もいるという種も何種かある。

渡りのコースは海岸沿いと海岸から少し内陸に入った水田地帯とがあるが、これは採餌対象の水生動物種の生息環境の違いから来るものではないかと思っている。海岸沿いは餌の関係で砂浜の広がった所を好むようで、かほく市から羽咋市に繋がる砂浜は餌となるナミノリソコエビが豊富である。

石川県のシギチドリを観察し始めて50年になるが、今も春と秋の渡り時期になると落ち着かなくなる。今はデジタル撮影であるが、以前はポジフィルムでの撮影だった。今となってはタゲリの繁殖記録、カラフトアオアシシギ、ヘラシギ、エリマキシギの夏羽はポジフィルムしか撮影記録のない貴重な資料となった。

今後、県内での記録を期待したい種はコバシチドリ、コモンシギである。

## 高松海岸のシギ・チドリ類

中川 富男(公益財団法人 山階鳥類研究所協力調査員)

高松海岸周辺は現在、石川県内で最大のシギ・チドリ類の渡来地である。1970年代、春の河北潟周辺の水田は沢山のシギ・チドリ類で賑わったが今は寂しくなった。また、金沢港大浜埋立地でも多くの種類を観察できたが、今ではゴルフ場と化している。

春、高松海岸周辺では、越冬していたハマシギとミユビシギが、徐々に冬羽から夏羽へと変化していく姿が観察でき、夏羽のトウネンやオオソリハシシギも渡来し、カモメ類とともに海岸は賑わう。また、シロチドリは一年を通し生息、繁殖をし、ヒナの姿を見ることが出来る。

8月に入るとトウネン、ミユビシギの成鳥が渡来する。トウネンは8月下旬ごろから群のほとんどが幼鳥になり、9月中旬には500羽を超えることも珍しくない。ミユビシギは9月上旬に200羽ほどの群の中に1~2羽の幼鳥が見られる程度で、9月下旬に400羽をこえる群となっても幼鳥の数は少なく、1割程度である。

また、1970年代には数千羽の大群が観察できたアカエリヒレアシシギは、1980年ごろから激減し、1998年のみ2,000羽を超える群が観察できたものの翌年には再び減少している。なお、ヘラシギもほとんど見られなくなっている。

高松海岸周辺で多くのシギ・チドリ類が渡来、越冬する理由として、良好なエサ環境が挙げられる。本海岸には波打際に生息する底生生物が多く、特にナミノリソコエビ(仮称 イシカワナミノリソコエビ)が多く、重要な餌となっていることが、中川律子(1998)「河北海岸の鳥類相の研究ーシギ・チドリ類の観察を通じた環境教育についてー」、環境省自然環境局生物多様性センター(2007)「生物多様性調査 種の多様性調査(石川県)報告書」の調査・研究で明らかになっている。

シギ・チドリ類の渡り(移動)の調査として、高松海岸周辺では1982年から個体識別用のリングを装着し、標識調査を行っている。回収記録では、高松海岸周辺で標識したトウネンが台湾、フィリピン、オーストラリアで各1羽再捕獲され、北海道コムケ湖で標識された個体を高松海岸で再捕獲している。

ミユビシギでは、オーストラリアビクトリア州サンデーポイントで標識された個体を高松で再捕獲し、高松海岸で標識した個体と同じサンデーポイントで再捕獲されている。また、国内の移動であるが、内灘町海岸で標識したシロチドリのヒナが、3年6ヶ月後、熊本県の有明海で再捕獲されている。

観察記録では、カラーリングやフラッグが装着された個体の確認から、アラスカで標識されたハマシギが、高松海岸で越冬していたということも分かっている。

## 北陸のシギ・チドリ類の生息場所

桑原和之(千葉県立中央博物館)

平田豊治(日本野鳥の会石川)・今井優(株式会社プレック研究所)

太平洋に面した地域に比べ、日本海に面した地域には、発達した干潟や塩性湿地が少ないため、北陸のシギ・チドリ類の生息場所は、多くないとされている。北陸に飛来するシギ・チドリ類の個体数は、それほど多くないと言われているが、果たして、そうだろうか？今回は、海岸、水田などの農耕地、河川などシギ・チドリ類の生息場所を北陸の環境と太平洋側の湿地と比較し、簡単に紹介する。

海岸部では、岩礁海岸が多くを占め、能登半島、富山湾に砂浜海岸が点在する。砂浜が南北に広がる河北海岸には、多くのシギ・チドリ類が記録される。渡りの時期には、トウネンが多い。春・秋の渡りの時期に見られるだけではなく、ミユビシギは越冬する個体も多い。トウネンやミユビシギとともに、ヘラシギが記録されることもある(山本ら2000)。シロチドリは周年記録され、地域により繁殖する。海上では、アカエリヒレアシギが多い年があり、砂浜に数千羽以上がみられることがある。日本海側には広大な干潟は少なく、七尾湾などで小規模な干潟が発達して、チドリ類が越冬する(桑原ら1989)。島嶼で、ヤマシギが営巣したこともある。一時的に海岸部に埋立地が造成されるとシギ・チドリ類が飛来する。金沢港、福井新港、富山新港などが造成された当初は、シギ・チドリ類が見られたが、開発とともに生息場所が消失した。

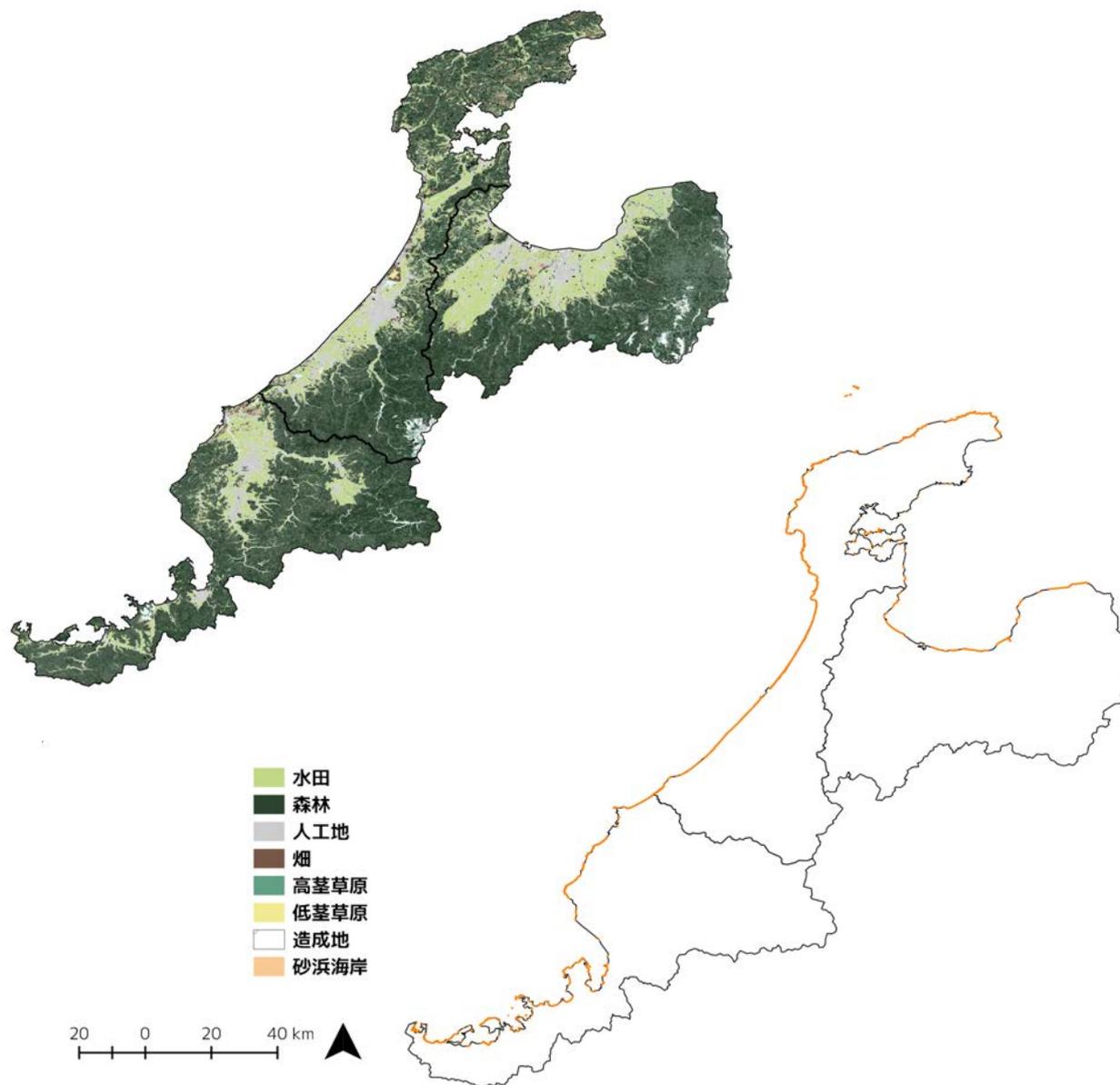
水田、ハス田、牧草地などの農耕地もシギ・チドリ類の生息地である。農耕地ではタゲリが越冬し、ケリの繁殖地ともなる。石川県河北潟周辺にはシギ・チドリ類が多く(山本ら1998, 2003)、例年チュウシャクシギやタカブシギがねぐらをとる。ハス田では、イカルチドリ、タシギが越冬する(桑原1988)。草原状になった環境が残されている空港では、オオジシギの囀りなどが確認される。

河川・湖沼でもシギ・チドリ類が記録される。河川ではイソシギ、イカルチドリ、コチドリが繁殖する。小河川の河口部でもチドリ類が越冬する(桑原2004)。

これらの北陸の多様な環境では、記録されるシギ・チドリ類の種数は多い。ただし、北陸におけるシギ・チドリ類の生息場所は、モニタリングサイトには、含まれていない。シギ・チドリ類、全体を把握する際、これら、北陸の湿地に関しても考慮が必要であろう。

引用文献:

- 桑原和之. 1988.石川県金沢市におけるイカルチドリの越冬記録.Bull.JBBA3:35-38.
- 桑原和之. 2004. 粟津川河口でのハジロコチドリの越冬記録.(編)時国公政.大空にはばたく珠洲市の野鳥たち:69.
- 桑原和之・時国公政・鳥木茂・永田敬志. 1989.ハジロコチドリ *Charadrius hiaticula* LINNEの越冬記録.Bull.J.BBA4:81-89.
- 山本浩伸・桑原和之・堀江剛介. 2000.1999年の石川県内におけるヘラシギの観察記録.Rep.Noto.Mar.Cent.6:27-32.
- 山本浩伸・桑原和之・竹田伸一・平田豊治・中川富男. 1998.河北潟の鳥類相.我孫子市鳥博報9:1-23. ● 山本浩伸・桑原和之・竹田伸一・平田豊治・中川富男. 2003.河北潟における鳥類相.我孫子市鳥博報11:45-74



**図：北陸の植生.**  
 右下の図は砂浜を示した図.  
 環境省自然環境保全基礎調査 第6-7回植生調査（一部第2-5回植生調査重ね合わせ植生）をもとに作成.

## 京都府の巨椋干拓地におけるケリ个体群の季節的動向

脇坂 英弥(兵庫県立大学)

機械化農業と生産性の向上を目的とする圃場整備事業が全国的に展開された結果、水田の生物多様性は著しく低下したといわれている。このような状況の中、水田を主たるハビタットとするケリ(環境省4次レッドリスト 情報不足)は、かつて東北や北関東地方でしか繁殖記録がなかったが、近年、近畿・東海・北陸地方の水田でも繁殖するようになった。餌となる小動物が減少したと推測される圃場整備済み水田で、ケリがいかに繁殖し、どのように个体群を維持しているのかを明らかにすることは、農業と鳥類の共存をはかる上で重要である。しかしながら、これまでに繁殖期と非繁殖期を含めた周年、あるいは長年にわたってケリ个体群をモニタリングした研究はない。本研究では2008年から2015年の8年間にわたるケリの个体群の継続調査に基づき、个体数の季節変動、繁殖成績を調査したので報告する。

調査地はかつて「巨椋池」とよばれる広大な湿地であったが、昭和初期より干拓事業が進み、耕作のための道路や用排水路が区画整備された農地となった。あわせて、周辺水田の用排水の改良も施され、昭和16年に事業が完成。現在は「巨椋池干拓地」と呼ばれている。

調査は巨椋池干拓地(OG区:冬期湿田あり)と、そこから隔離された北川顔(KI区:冬期湿田なし)の圃場整備済み水田の2か所で行ない、ケリの个体数、分布、集団サイズ、繁殖の有無と成績、餌量を記録した。両区ともにケリは毎月必ず確認され、个体群が周年維持されている留鳥であることが示された。また、抱卵もしくは育雛中のペアが確認された繁殖期と非繁殖期の平均个体数を比較したところ、両区とも年によるばらつきはあるものの、繁殖期と非繁殖期とも同程度の個体が生息していることが分かった。

いっぽう、各月の集団サイズをみると、2月から5月は1羽か2羽のケリが調査地に広く点在しているのに対し、6月以降には3羽以上の集団が出現するパターンが毎年繰り返されていた。このことは、ケリはペア単位で繁殖期を過ごすか、繁殖が終了すると集団になる傾向があることを示している。ただし単独個体と2羽の記録はどの月にも必ず存在することから、全ての個体が非繁殖期に集団となるわけではなかった。

発表では、これらのことに加えて、餌量および冬期湿田の存在がケリの繁殖成績に与える影響についても言及する。

## シギ・チドリ調類査へのお誘いのお誘い

奴賀 俊光 (NPO法人バードリサーチ)

現在、モニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査のコアサイトで、十分な調査ができていないサイトがいくつかあります(平成26年度冬期調査時点で少なくとも3/52サイト)。一般サイトではもっと多くなります(23/94サイト)。理由は、調査員の引退や高齢化等で、調査担当者が不在になったり、人員不足で調査ができない等、後継者や協力者がいないことです。その他の調査でも、現在は調査ができていますが、同様の問題をかかえながら行われているサイトが少なくないようです。シギ・チドリ類調査だけではなく、他の調査でも同様です。

特にシギ・チドリ類調査では、後継者不足や新人登用が難しいという問題が当初からあり、10年たっても改善されてきていません。シギ・チドリ類は、マニアックで識別が難しいからという問題もあるかもしれませんが、若手のバードウォッチャーでも識別に詳しい人も増えてきている気がするのです。識別の問題だけではなさそうです。

識別能力もあり、「調査に興味があり参加してみたい」という意見も聞くのですが、同時に、「調査がどのようなものか得体が知れない」、「調査は難しい事をしている、敷居が高い感じがする」、「自分なんか参加しても良いのかわからない、躊躇している」という意見も聞きます。

### しかし、調査といってもそんなに難しいことはしていません！

実際やっていることは、普段のバードウォッチングと同様に、何の種がいるかを見て、何羽いるかを数えることだけです。それでも、数を数えるということに抵抗があったり、慣れていない人もいるかもしれません。そこで、百聞は一見にしかず！バードリサーチでは、調査がどのようなものなのか、実際に調査に同行して体験してもらい、どういふものか理解してもらおう「みにクル」というイベントを実施しています。そして、シギ・チドリ類調査の「みにクル」をこの秋から始めました。秋期調査のついでに、同行したい人を若干名募集し、調査を体験してもらいました。今回は、シギ・チドリ類秋期調査で実施した「みにクル」の様子を報告いたします。観察会のように、出現種すべてをチェックしたり、詳しい解説を行うわけでは無く、実際の調査のように、例えば干潮の時間を気にしたり、天候を気にしたり、そのサイトごとの注意点に気を付けながら調査をします。調査のついでなので、調査担当者に余計な出費はかかりません。

シギ・チドリ類調査員のみなさま、後継者探し、協力者探し、若手指導のため、「みにクル」を自分の調査地でやってみてはいかがでしょうか！？参加者募集にはバードリサーチが募集のお手伝いをいたします。ご協力いただける方は、氏名、調査地名、連絡先をお知らせください。 奴賀nuka@bird-research.jpまで。

# ポスター

## 東アジア最大級のシギ・チドリ渡来地の状況 生態的、社会的つながりから見た中国・鴨緑江河口干潟

安村 茂樹 (WWFジャパン:公益財団法人 世界自然保護基金ジャパン)

### 【背景】

中国と北朝鮮の国境を流れる鴨緑江の河口干潟は、東アジア・オーストラリア地域フライウェイを利用し、繁殖地へ向かうシギ・チドリにとって、生態的、地理的な観点から最大級で、最後の中継地といえる。この沿岸域は81,400haが国家級自然保護区に指定されていると同時に沿岸漁業にとっても重要な地域である。鴨緑江河口干潟周辺で生産、水揚げされる二枚貝などの水産物は日本にも輸入されている。

2010年3月から2011年12月にかけて、WWFジャパンは、遼寧省海洋漁業庁、遼寧省水産科学研究院、瀋陽理工大学等の協力を得て、鴨緑江河口干潟における渡り鳥、底生生物、沿岸漁業の現況とそれらの生態的、社会的つながりを把握する調査を実施した。

### 【結果と考察】

2010年、2011年の春期渡り調査では、延べ21種176,535羽(2010)、19種121,739羽(2011)を記録し、優先するオオソリハシシギ *Limosa lapponica*、オバシギ *Calidris tenuirostris*、ハマシギ *Calidris alpina*の3種で10万羽を越えた。

底生生物の群集構造は比較的単純で、河口域の生物多様性が低く、個体群も低密度であった。渡り鳥が捕食しない巻き貝の一種 *Bullacta exarata* が優占するなど、二枚貝、巻き貝、多毛類で20年前と比較して優占種の生態的遷移が起きていることが明らかとなった。

1960年代からの沿岸域の工業化に伴う大規模な埋め立て、80年代のエビ養殖での餌生物採集、近年のナマコ養殖池の造成や薬剤使用などによる社会・経済的な諸活動が干潟環境の消失・劣化が底生生物層の生態的遷移の一因となっていることが示唆された。

鴨緑江干潟の主要水産品であるアサリ *Ruditapes philippinarum*、ハマグリ *Meretrix meretrix* が選択的に渡り鳥に捕食されていることは確認されなかった。しかし、直接的な軋轢として、播種直後から2週間ほどに起きるアゲマキ *Sinonovacula constricta* 稚貝の捕食と漁業関係者による捕食渡り鳥の放逐が限定的に起きていることが聞き取りから明らかとなった。渡り鳥が捕食するのは、主にモモノハナガイ *Moerella jedoensis* オキシジミガイ *Cyclina sinensis* (稚貝)、チロリ *Glycera chiorori* など潮間帯下部の生物種で、その資源量は、渡りのピークから1~2ヶ月で通常量に戻るということが明らかとなった。

今後は、干潟資源を持続的に利用した二枚貝の生産と消費を通じた渡り鳥の生息地保全について、日本、中国の関係者の理解と関心を高め、具体的な取り組みを協働して促進していく予定である。

本調査は、黄海エコリージョン支援プロジェクトの一環として実施した。

## 河北潟周辺のシギ・チドリ類

中村 正男（日本野鳥の会石川）

### ①ヨーロッパムナグロ -本州初記録-

河北潟で2012年2月に観察されたヨーロッパムナグロについて、ムナグロとの比較や観察時の状況を報告します。

(引用文献:中村正男・矢田新平・池長裕史. 2013. 石川県の河北潟干拓地におけるヨーロッパムナグロ *Pluvialis apricaria* の本州発記録. 日本鳥学会誌.62(2): 189-191.)



### ②河北潟近郊のシギ・チドリ類

コキアシシギ、コシヤクシギ、シベリアオオハシシギ、アメリカウズラシギ、サルハマシギ等を写真で紹介します。

### ③かほく市海岸のシギ・チドリ類

キアシシギの群れ、チュウシヤクシギの群れ、越冬ミコビシギ・ハマシギの群れ、ヘラシギ等を写真で紹介します。



## 一色干潟で観察された標識キアシシギ

高橋 伸夫(西三河野鳥の会)

愛知県一色干潟において、年度季節が異なり5度観察されている同一の標識キアシシギについて報告する。

- 1度目の飛来:2013年7月14日～8月15日.
- 2度目の飛来:2014年5月28日の1日のみ.
- 3度目の飛来:2014年8月6日～9月13日.
- 4度目の飛来:2015年5月22日の1日のみ.
- 5度目の飛来:2015年8月17日～9月18日.



これまで西三河で観察されてきたシギ・チドリの多くの種で、春の渡りでは滞在期間が短く秋の渡りでは滞在期間が長いことが知られていた。キアシシギのように飛来数の多い種では秋の渡りの滞在中に個体の入れ替わりの有無など不明な点も多かったが、この個体では春の渡りと秋の渡りにおける当地での滞在期間をほぼ正確に確認することができた。

### ☆同一地利用の考察

一色干潟の面積は約1000haとされている。キアシシギの生息が集中する海岸線はその西端に近い1km程度の範囲であるが、この標識個体は衣崎新港から東へおよそ250m～350mあたり、3～4番目にある消波ブロックの周辺約100m程度の間を主な採餌テリトリーとしている。多くのキアシシギでは干潮になると沖の干潟に移動して採餌するが、この個体はテリトリーの周辺に留まって採餌することが多かった。満潮時はこの範囲に留まらず他のキアシシギが群れる場所へ移動して集団で休息することも確認されているが、キアシシギの群れが無い場合は単独で採餌テリトリー内にある消波ブロックの隙間で休息したこともある。この個体では中継地における採餌テリトリーを確保していることが、春秋の渡りで同一場所への飛来を誘引している要因なのかも知れない。

一色干潟の周辺ではキアシシギの他にもオーストラリア東部で標識されたオバシギや中国で標識されたトウネンなど、標識を装着したシギを観察することも稀ではない。一般に地球規模の渡りを行うシギやチドリの種では、春と秋あるいは成鳥と幼鳥で渡りのコースが異なる例が知られている。また渡り鳥の多くでは、繁殖地や越冬地で同一個体が数年にわたって確認される例も少なくない。しかし南半球で標識されたシギが、渡りの中継地である日本国内の同一場所で5度の飛来が観察され、しかも春秋の渡りで飛来が確認されていることは極めて稀な例といえる。

## シロチドリ現状について

守屋 年史 (NPO法人バードリサーチ)

シロチドリ (*Charadrius alexandrinus*) は、カモメ目チドリ科に属する小型のチドリである。砂浜、河川の砂州などに生息し国内で繁殖する。

かつては、個体数も多く、砂浜などでごく普通に観察される種であったが、1970年台から継続する全国のシギ・チドリ類のモニタリング調査の結果を用いた分析から、本種の大幅な減少が報告されている。環境省のレッドリストや各都道府県のレッドリストにも絶滅危惧種として扱われてきてはいるが、2000年からの繁殖期の観察記録数を用いた直近における分析でも、減少傾向が引き続いており状況は改善されていない。シロチドリの減少要因については、供給される砂の減少、漂砂の動きの変化等による砂浜の減少やレジャー利用など活動による繁殖阻害などが報告されている。

### ○モニタリング調査の結果からみるシロチドリの現状

1980年頃と2000年頃を比較すると大幅に観察個体数が減少していた。また減少は、春期、秋期とも1970-1980年頃に大きく減少し、その後、低い水準で安定もしくは、やや減少している傾向にあった。直近の2000年から2014年の繁殖期(5-7月のデータ)でも、シロチドリの減少傾向は続いている。

また、全国の各調査サイトにおけるシロチドリの動向では、春期に21サイトで減少傾向(1サイトで増加傾向)、秋期に29サイトで減少傾向(4サイトで増加傾向)、冬期に21サイトが減少傾向(増加傾向のサイト無し)と広範にわたり減少傾向を示している。

### ○減少要因は？

砂浜の減少が、最も直接的かつ致命的な要因と考えられる。気候変動や侵食といった自然環境の影響によるものが考えられる一方で、河川工作物、港湾工作物による影響を受けて、河川からの土砂の供給不足、漂砂の動きの変化による痩浜など、人為的な要因も大きい。また、繁殖阻害に関するものは、レジャーなどの砂浜における人的活動が要因の一つと考えられており、車両の乗り入れ禁止や、繁殖地への侵入の禁止措置などが対策されている。

### ○今後の展開

千葉県九十九里浜を主なフィールドとして、個体識別を伴った繁殖状況の調査を行っている。繁殖成績、つがい関係、営巣地周辺の環境、コアジサシとの関係について今後も調査を継続し、保全の基礎資料を収集する。

本調査においては、非繁殖期には越冬期の分散状況についても調査を行っており、カラーフラッグが付いたシロチドリを観察されましたら、ご一報いただければ幸いです。



### 本多の森ホール 第3会議室

アクセス（※駅が新しくなり、HPの情報とは違うので注意！！）

金沢駅東口バス乗り場 7番から 11、12、16系統のバスで12分(200円)、出羽町下車、徒歩3分



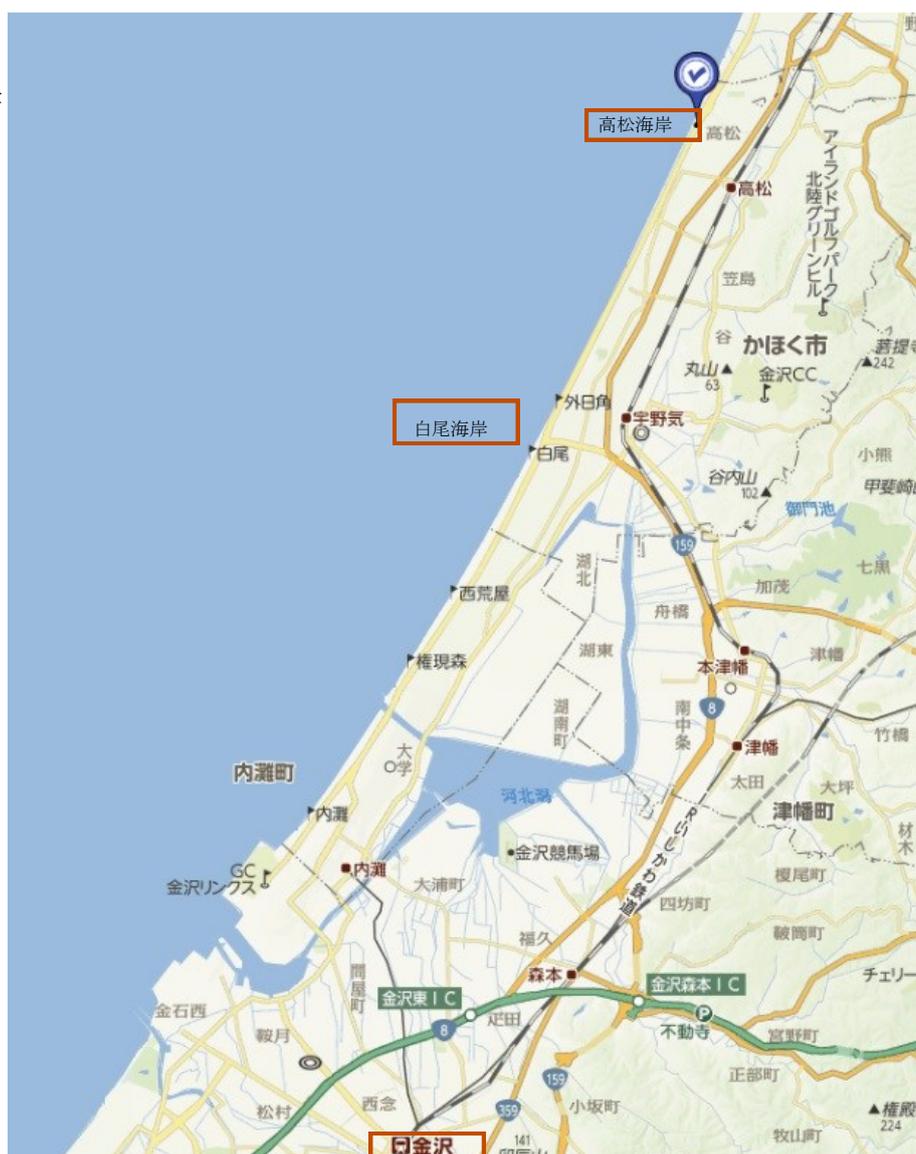
## 懇親会 18:00～

台場 金沢駅前店  
(金沢市此花町6-10金沢都ホテル1F)  
Tel: 076-263-9191



## エクスカーショ

10/25(日) 8:15 発  
金沢駅西口集合  
高松海岸周辺の海岸





2015年度 重要生態系監視地域モニタリング推進事業  
(モニタリングサイト1000)  
シギ・チドリ類調査  
第12回モニタリングサイト1000交流会(金沢)要旨集 第12号  
発行日:2015年10月24日  
編集:守屋年史・奴賀俊光  
発行:NPO法人バードリサーチ  
〒183-0034 東京都府中市住吉町1-29-9